

すべての人々が安心して暮らせる世界を目指して

青海中学校 2年1組 小田嶋 陽菜

私は、8月5日から7日にかけて広島市で行われた広島派遣事業に参加してきました。

参加した動機は、過去に広島に投下された原爆について、ニュースやSNSで見ただけではなく、自分の目で確かめたい、見てみたいと思ったからです。

まず1日目に被爆者の方から体験講話をお聞きしました。講師の山口誠治さんから、ご家族の被爆体験や山口さん自身の放射線による病気、忘れてはいけないことなど、たくさんの貴重なお話しをお聞きしました。山口さんは母親の胎内で被曝しました。山口さんの二人の兄は爆心地から13kmの疎開先の畑で被爆しました。一人の兄は原爆投下後に降った「黒い雨」の影響で、足の肉が腐ってしまいました。もう一人の兄は放射線が原因で亡くなってしまいました。自分の周りの人が亡くなったり、苦しんだりしているのに、通り過ぎるだけで何一つ助けることができなかった当時の様子を聞き、山口さん本人も辛い思いをされたそうです。

私は山口さんから、「私たち日本人が一つ忘れてはいけないことがある」と教えていただきました。それは日本の加害の面です。自国の被害だけでなく、日本も相手国を傷つけたことを忘れてはいけないという、新しい視点を持つことが出来ました。「加害」という絶対に忘れてはならない面も一緒に伝えていく必要があると思いました。

次に、2日目に見学した大和ミュージアムです。大和ミュージアムでは呉市の歴史や戦艦「大和」についての情報などが展示されていました。大和ミュージアムで心に残ったのは、人間魚雷の特攻隊員、塚本太郎さんが最期に残したボイスメッセージです。塚本さんは、メッセージの最後に「こんにちは、元気に行きます」という言葉を残していました。私は、弱音を誰にも見せず、無理に強がっているように感じました。自分はこのことはしたくない。だけど、国に従わなければいけないという当時の現状を切実に感じました。

そして、私が今回の研修で一番心に残ったことは、3日目に見学した平和記念資料館です。そこには、火傷をした方の写真や、ボロボロになった服やお弁当箱などがたくさん展示されていました。ある一人の被爆者の方は、原爆が投下される前日に「お父さん、今日おいしいスープ作ってあげるね」という言葉を残していました。私はその言葉を聞いて、やりたかったこと、達成したかったこと、いろんな思いがあったのではないかと思いました。その思いを叶えるために、「生きたかっただろう」というふうに感じました。

また、原爆は人の願いや生きる希望を失わせ、「あたりまえの生活」や「あたりまえにある幸せ」を一瞬にして奪う本当に恐ろしいものなのだと感じました。私は、生きる希望や、あたりまえの生活を奪う核兵器を誰一人使うべきではないと、強く思います。

ある一人の被爆者の方は、「一生懸命すると何でも面白い」という言葉を残しています。私はその言葉のとおり、今、学習や委員会、部活など活動できることに感謝しながら一生懸命頑張ろうと思います。

私にできることは、今回の研修で学んだことを他の人に伝えることだと思います。戦争の悲惨さや辛さを周りに伝えることで、世界中のすべての人々が安心して暮らせる世界になってほしいです。

最後に、今回の研修でお世話になった糸魚川市役所のみなさん、先生方、生徒のみなさん本当にありがとうございました。